東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

伝聞による証拠性の標識：イタリア語のDICE CHEとルーマニア語のCICAの文法化の度合いについて

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鈴木, 信吾, Suzuki, Shingo
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1474

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

伝聞による証拠性の標識：
イタリア語のDICE CHEとルーマニア語のCICĂの
文法化の度合いについて

鈴　木　信　吾

東京音楽大学研究紀要　第46集　－2022－

伝聞による証拠性の標識：
イタリア語のDICE CHEとルーマニア語のCICĂの文法化の度合いについて*

鈴 木 信 吾

1. はじめに

イタリア語やルーマニア語には、形容詞か副詞、名詞、動詞のどれかで文が始まり、そのいずれの場合も、すぐ後に補文標識（complementizer）が続いたうえで、これに文が連なって成り立つといった構文が存在する。文頭における最初の要素は、無変化のまま形式が固まってしまっているので、補文標識が導く文には独立節としての性格が強く備わっている。類型論的に言うと、これに並行した同じような形式は、上にあげた２言語に限らず、他のロマンス諸語やそれ以外の言語（たとえば英語）にも見られる（Cruschina & Remberger, 2017, p.81参照）。言語の違いを越えて存在するということは、この形式が多かれ少なかれ文法化（grammaticalization）の過程にあるということの証しでもある（Brinton & Traugott, 2005, pp.28, 109参照）。

ここで、具体的に構文の概要をつかむために、イタリア語（It.）とルーマニア語（Ro.）から例を引いておこう。下線を施したのが同種の構文の例であり、それぞれの構文の文頭に太字で示したのが問題の形式である。[1]

(1) It. “È così maligna!” si lamentò Mabel.
“**Sicuro che** è maligna” dissi vivacemente（Cristie It., p.76）
Ro. – Sunt vorbe atât de răutăcioase, a suspinat Mabel.
– **Firește că** sunt răutăcioase, i-am zis pe un ton aspru（Cristie Ro., p.100）
「『そりゃあ、ひどい噂ですの』とメイベルはうめくように言いました。
『わかりきったことですよ』とわたしはテキパキと言ってやりました」（Cristie Jp., p.151）
［1556–1557］

* 本研究はJSPS科研費 JP15K02482, JP18H00667の助成を受けたものである。

1 (1), (2) の例は、科研費（すぐ上の注 * を見よ）の助成金による共同研究の一環として2018年に作成されたCD内の第1部「Agatha Christie, *The Thirteen Problems* の英語・スペイン語・フランス語・イタリア語・ブラジルポルトガル語・ポルトガルポルトガル語・ルーマニア語のパラレルコーパス」からの引用である。引用例の各セットの最後に［　］で示したのは、パラレルコーパス内の通し番号である。参考のために、(1), (2) に対応する英語原文を順にあげておく。
(i) Eng. “It is so wicked,” moaned Mabel.
“Of course it is wicked,” I said briskly（Cristie Eng., p.114）
(ii) Eng. Pity we're not up against a real teaser. One of the best brains in England, I've heard it said. Pity it's all such plain sailing（Cristie Eng., p.294）

(2) It.　Peccato non avere un caso veramente interessante. Ho sentito dire che è uno dei più bei cervelli d'Inghilterra. **Peccato che** qui scorra tutto liscio come l'olio (Cristie It., p.200)

Ro.　**Păcat că** nu avem de-a face cu o problemă spinoasă. Unul dintre cei mai inteligenți oameni din Anglia, din câte am auzit. Din fericire, avem de-a face cu un caz simplu (Cristie Ro., p.254)

「これが事件らしい事件でないのがかえすがえすも残念だな。サー・ヘンリーといえばイギリスの誇るもっとも優秀な頭脳の持ち主の一人だと聞いていたが。こんな簡単な事件では」(Cristie Jp., p.411)　[4693–4696]

(1) の下線部の構文は「わかりきったことですよ」という和訳になっているが、イタリア語文頭のsicuro「確実な」はもともと形容詞、ルーマニア語文頭のfirește「当然、もちろん」は副詞である。それらに補文標識のche, căが続いている。したがって、噂のひどさの訴えに対してsicuro che, firește căを使って受け答えた表現をできるだけ忠実に訳し直すとすれば、「ひどいのはあたりまえですよ」とでもなるであろうか。一方、(2) の英語原文にはpityで始まる文が２つあるが（注１の (ii) 参照）、イタリア語では後の文、ルーマニア語では前の文に問題の形式peccato che, păcat căが使われている。peccato, păcatは両方とも元来「残念なこと」を表す名詞である。ルーマニア語にこの形式が現れる最初の文は、せっかく頭の切れる男がいるのに、事件が難解でなくて「かえすがえすも残念だな」と、ルーマニア語版にも調和した和訳になっている。もう一方の最後の文の和訳は、「こんな簡単な事件では」と端折ってあるが、イタリア語版はpeccato che「…では残念だな」で始めることを忘れていない。

上には２セットしか例をあげなかったが、これらの文内容の性質だけを考えてみても、今問題にしている構文は、一般的に、補文標識に続く文の命題内容を伝達するというよりも、むしろ、それに対する話者自身の評価的価値 (evaluative value)、証拠的価値 (evidential value)、認識的価値 (epistemic value) を表そうとする傾向が極めて強い。別の言葉で言えば、その内容を話者がどのように評価しているのか、あるいは、その内容を証拠だてる情報の出どころがどこなのか（聞いたものなのか、推量によるものなのか、など）、その内容の可能性や必然性を話者がどう認識し判断しているのか、といった方向に重点が移っているということである。

本稿では、研究の対象を大幅に絞り、文頭に現れる「発話行為『言う』を表す動詞＋補文標識」の形式のみを対象としながら、イタリア語とルーマニア語でそれに該当するdice cheとcicăについて検討していきたい。例文 (3) 中に太字で示したのがこれらの形式である。２つの文の意味は、互いにほぼ等価であると考えてよい。

(3) It.　**Dice che** domani pioverà (Cruschina, 2015, p.2)

Ro.　**Cică** mâine o să plouă

「明日は雨だそうだ」

冒頭で述べたとおり、これらの形式は無変化のまま固定化してしまっている。とりわけ、固定化をかなり進めたルーマニア語のcicăは、音韻縮約（phonological reduction）を受けた結果、動詞と補文標識との間の境界に融合を生じさせ、正書法上1語として綴られる。[2] dice cheやcicăに含まれる動詞（に相当する部分）は、「言う」という発話行為そのものを表現するよりも、むしろ伝聞（hearsay）つまり人を介しての聞き伝えであるということに関心を向けさせようとする働きをもつ。これは、dice cheやcicăという形式が証拠性（evidentiality）を示す標識と化してしまった結果でもある。これらのことを検証するために、これから、dice cheとcicăを音韻・形態面、統語面、意味面から細かく分析していく。そして、この分析をとおして得られた結果をもとに、dice cheとcicăの文法化の度合いの違いを洗い出す。分析に当たっては、まず、音韻縮約を起こしていないイタリア語のdice cheから始め（第２節）、次に、他のロマンス諸語の状況を瞥見したうえで（第３節）、最後に、ルーマニア語のcicăの文法化の進み具合を考察する（第４節）。

２. イタリア語のDICE CHE

2.1. 現代イタリア語には、非人称・受身のsiを使ったsi dice che「…と言われている」という一般的な表現と並んで、これと同様に、間接話法によって伝聞の証拠性（hearsay evidentiality）を示すdice cheのような表現が存在する。２つの形式に共通して使われているdiceは、元来、動詞dire「言う」の直説法現在３人称単数、cheは補文標識である。前者にのみ現れるsiは、非人称・受身の接語代名詞で、これを伴うsi dice cheの使用場面は広く、話し言葉・書き言葉を問わず、イタリア語が話される地域全体にまたがっている。一方、これから問題にする後者、つまり、伝聞の証拠性を示すdice cheの方は、特にイタリア半島中部以南の話し言葉に見られるのが特徴的である（Cruschina, 2015, p.7参照）。次の２つの例文は、このような性質をもつdice cheが出現する作品からの借用である（以下、いずれの例文中でも、そこで問題とするdice cheなどの各形式を太字で示す）。

(4) E poi non so cosa gli fanno… **dice che** li bastonano（Rohlfs, 1966–1969, vol. 2, p.235, §520より引用。原典：A. Moraviaの小説 *La romana,* II, cap.8）
「［警察で］どんなことされるかしれないわ…なぐられることもあるんですって」（Moravia Jp., p.347）

(5) **Dice ch**'era un bell'uomo e veniva dal mare（Serianni, 1991, p.255より引用。原典：P. Pallottino & L. Dalla, *4 marzo 1943*の歌詞）
「彼は美男だったそうで、海の向こうからやって来たということだ」

2 ルーマニア語には、cică 以外にも、これと同様の性格をもって音韻縮約した証拠的価値をもつ parcă（<pare că「…のようだ」）やcredcă（<cred că「…と思う」。Dexonlineではcrică の形で検索用の見出し語に収録）などがある（Remberger, 2015, p.38参照）。

いずれの例においても、太字のdice cheは「言う」という発話行為そのものに言及しようとするものではなく、むしろ、cheに続く命題内容が間接的に伝達された情報であるということを示すものである（Cruschina, 2015, p.7参照）。別の観点からすれば、dice cheは具体的な発話行為の主体が想定されておらず、非人称的な意味をもっているということでもある。(4)は、イタリア中部ローマ出身の作家 Alberto Moravia（1907–1990）が自身の小説のなかで主人公のローマ女性に言わせているセリフであるが、dice cheという形式が伝聞、うわさといった情報の出どころを話者の側から証拠だてる語用論的な標識の役割を果たしていることは、「…こともあるんですって」という清水三郎治の和訳からも読み取れる。一方、(5)は、シンガーソングライターLucio Dalla（1943–2012）の歌の出だしである。本人は北部ボローニャ出身の歌手であるが、この作詞にはローマから移住してきたPaola Pallottino（1939–）が大きく携わっていたようである。[3] 先行文脈のないところで突然切り出される（5）のdice cheも、(4)と同様、非人称的な証拠性の標識であることがわかる。

上の（4），（5）は、dice cheが一義的に非人称的な伝聞による証拠性を示す例であるが、次の例は必ずしも一義的であるとは言えない。

(6) Gianni non ha superato l'esame. **Dice che** non ha saputo rispondere a nessuna domanda (Cruschina, 2015, p.9)

「ジャンニは試験に合格しなかった。 (i) ［人の話では］どの質問にも答えられなかったそうだ；

(ii) ［彼自身、］どの質問にも答えられなかったと言っている」

(6)の太字dice cheは、中・南部のイタリア人が形式ばる必要のないごく日常的な場面で使ったものであれば、非人称的に捉えて証拠性の標識としての解釈を施すのがより自然な解釈かもしれない(i)。しかし、イタリア語は主語の表現が義務的ではないので、形が3人称単数の diceが前の文の主語Gianniをそのまま受け継いでいるとする解釈も十分に可能である(ii)。特に、dice cheを証拠性の標識として受け入れない北部のイタリア語話者にとっては、(ii)の解釈が残されるのみである（Cruschina, 2015, p.8参照）。[4]

伝聞による証拠性のdice cheは、非人称的なまた聞き（third-hand）の場合ばかりでなく、直接聞いたことを証拠とするじか聞き（second-hand）の場合にも使われる（second-hand, third-

3 この経緯については次のウェブページを参照のこと：
https://it.wikipedia.org/wiki/Paola_Pallottino（アクセス日：2022年8月6日）；
https://it.wikipedia.org/wiki/4/3/1943（同上）。

4 以下は筆者の個人的な経験であるが、イタリアで広く知られている(5)の歌のdice cheの解釈を北部ミラノ近郊出身のインフォーマントに対面で尋ねてみたところ、即答が得られなかった。このインフォーマントは、インターネットで調べたうえで後日になって筆者の期待する答えを送信してきた。この事実は、北部イタリア語の状況を知るうえで1つの手がかりとなろう。

handという用語についてはWillett, 1988, p.57を参照)。次の2例は、ローマで転写されたイタリア語の資料体からPietrandrea (2007)が引用したものを、いずれも筆者が単純化して書き改めたものである。[5]

(7) Ha detto che grosso modo va abbastanza bene, solo l'aorta **dice che** è un po' dilatata
「彼は、大体のところまあ大丈夫だと言った。ただ、大動脈は少し膨らんでいるとのことだ」
(8) M'avete cercato perché **dice che** volevate un grigliato, dovevate fare un'offerta. Me l'ha detto Gianni stamattina
「聞くところでは、君らは升目用紙が欲しくて、申し入れの必要があったので、僕を探してたんだね。今朝ジャンニが僕にそう言ったよ」

(7)は冒頭に、(8)は後半の文中に、それぞれ下線で示した動詞ha detto「言った」が現れる。どちらも、過去時制の3人称単数という形が十全な意味を担い、発話の行為者たる主語が具体的な指示対象をもっている。(7)では言外に主語(ここには表現されていないが、たとえばil medico「医師」)が想定されるのに対し、(8)では主語(Gianni)が表現されている。一方、両方の例における太字dice cheは、これまで見てきたとおり固まった形式になってはいても、特定の人物が言ったことを表すという点では、(7), (8)ともに、活用を伴うha detto che「…と言った」に似通っている。発話という行為自体からは距離を置き、間接的な伝達という証拠性の標識となってはいるものの、(7), (8)のdice cheは、水入らずのじか聞きで聞いた内容を伝える役割を負っており、具体的な発話の行為者の想定を許す。こうして、直接聞いたことをじか聞きで伝えるdice cheには、はっきりした情報源を暗に示すことも許されているのである。

話の本筋からは少し逸脱するが、歴史的に見ると、伝聞の証拠性を示すdice cheは、古イタリア語(13世紀のテクストによる中世フィレンツェ方言)の時代にまでさかのぼることが知られている(Rohlfs, 1966–1969, vol.2, p.235, §520も参照のこと)。次の2例は、13世紀末に古イタリア語で書かれた説話集『ノヴェッリーノ』から引いたものである。

(9) Il buono re Ricciardo d'Inghilterra […] fece d'i Saracini sì grande uccisione, che le balie de' fanciulli dicono, quand'elli piangono: "Ecco il re Ricciardo", acciò che come la morte fu temuto. **Dice che** Saladino, veggendo fuggire la gente sua, domandò […] (Lorenzetti, 2002, p.218より引用。原典:Novellinoの説話LXXVI)
「勇ましい英国王リチャードがサラセン人の大虐殺を行ったので、そこの乳母たちは、子供が泣き止まない時、『リチャード王が来るわよ』と脅す。それは、死と同じくらいに彼が

5 2つの例の原文は、それぞれ次のとおりである(Pietrandrea, 2007, p. 56)。
(7) < mah ha detto che che grosso grosso modo va abbastanza bene solo solo l'aorta dice che è un po' dilatata
(8) < senti na cosa m'avete cercato perché dice che volevate un grigliato, dovevate fare un'offerta. Me l'ha detto XYZ stamattina

恐れられていたからだ。サラディンは、自分の軍勢が逃げるのを見て、次のように尋ねたという…」

(10) Uno, lo quale ebbe nome Tale milesius, grandissimo savio in molte scienzie, e specialmente in istrologia, secondo che si legge in libro De civitate Dei, in libro sexto: **dice che** questo maestro albergò una notte in una casetta d'una feminella (Novellino, p.215, XXXVIII)
「名前をミレトスのタレスという男、それも、多くの学問、特に天文学に秀でて博学な男のことで、『神の国』第6巻が伝えるところでは、この学者は、ある夜一人のつましげな女の家に泊まったということだ」

このように、dice cheという固まった形式は、古イタリア語の時代から存在したようである。上の2つの例からもわかるように、伝達による証拠性のなかには昔話や逸話などの民間伝承(folklore)も数に入る(Willett, 1988, p.57参照)。

2.2. 話を本筋に戻して、今まで問題にしてきた伝聞による証拠性の標識dice cheにおけるdiceが形態論的に無変化、つまり、法や時制、人称や数により活用することがないのを確認しておこう。そこで、例として(5)の最初の部分だけをもう1度抜き出してみよう。

(11) **Dice ch'**era un bell'uomo
「彼は美男だったということだ」

イタリア語のdiceは、元来、動詞dire「言う」の直説法現在3人称単数の形だが、証拠性の標識として固まってしまった形式では、この非人称的な形態上の特徴を変えることができない。

(12) a. **Diceva che** era un bell'uomo (Cruschina, 2011, p.110)
「彼女は、彼が美男だと言っていた」
b. **Disse che** era un bell'uomo (*loc. cit.*)
「彼女は、彼が美男だと言った」

(12)の2例中の動詞direは、いずれも(直説法の3人称単数である点は変わりないが)時制が過去に変わっていて、aのdiceva「言っていた」は半過去、bのdisse「言った」は遠過去である。この場合は、「彼が美男だ」という内容がかつてうわさされていたことを非人称的に表すわけでは決してない。太字のdicevaとdisseに主語は表現されていないが、はっきりとした指示対象をもつ発話行為の主体の存在が想定される(和訳の「彼女は」)。一方、ここで問題にしている固まった形式dice cheは、(12)a, bの話者がその言われた内容を聞いたのが明らかに過去のことであっても、無変化のままである。それは、(7), (8)の各例文中に下線で示した近過去のha

detto「言った」の作りあげる文脈のなかに無変化のdice che（太字）が現れていることからもわかる。さらに、問題のdice cheにおけるdiceは、無変化であるばかりでなく、non「…ない」で打ち消すこともできないし（(13)a）、副詞によって修飾することもできない（(13)bの下線spesso「しばしば、よく」）。

(13) a. Non **dice che** era un bell'uomo (Cruschina, 2011, p.110)
「彼女は、彼が美男だったとは言っていない」
b. **Dice** spesso **che** era un bell'uomo (*loc. cit.*)
「彼女は、よく彼が美男だったと言う」

(13)の2例の使用場面は、したがって、（和訳の「彼女は」に示したとおり）発話行為の主語に指示対象がある場合にしか残されていない（以上、Cruschina, 2011, p.110参照）。

2.1節の冒頭で述べたように、間接的に伝達された証拠性を表すdice cheと似た表現として、非人称・受身の接語siを伴うsi dice cheがある。これら2つの表現は、その使用範囲の幅こそ違え(使用地域や言語使用域（register）の幅はsi dice cheの方がかなり広い)、一見、非人称的に間接話法を導くという点で互いに接点を共有しているように見える。しかし、こうした接点の共有は見かけに過ぎず、実際のところ、両者は本質的に性格を異にするものである。それは、非人称・受身の接語siを用いた次の一連の例を上の(12), (13)と対比してみればわかる。[6]

(14) a. **Si diceva che** mio nonno era un bell'uomo
「私の祖父は美男だと言われていた」
b. **Si disse che** mio nonno era un bell'uomo
「私の祖父は美男だと言われた」
(15) a. Non **si dice che** mio nonno era un bell'uomo
「私の祖父は美男だったとは言われていない」
b. **Si dice** spesso **che** mio nonno era un bell'uomo
「私の祖父は美男だったとよく言われる」

すでに見たように、(12), (13)のdice cheには、伝聞の証拠性としての解釈は成り立たない。それは、これが固まった形式なので、diceの法や時制、人称、数を変えることもできないし、diceを打ち消したり修飾したりもできないからである。それに対し、すぐ上の(14), (15)を見ればわかるとおり、si dice cheのdiceにはこうした制約がない。さらに付け加えるなら、si dice cheに導かれる従属節の動詞は、dice cheの場合とは違い、むしろ接続法に置かれる方が好ま

6 煩雑化を避けるため、ここでは(14), (15)の4例中のcheに導かれる主語節の半過去を、(12), (13)の場合と同じ直説法に置いてeraとしたが、非人称・受身のsiを伴う前者のような例の場合は、同じ半過去でも接続法fosseが好んでよく使われる。

れる傾向にさえある（注６参照）。要するに、dice cheとsi dice cheは２つの別の構造をもつ形式なのである（以上、Cruschina, 2011, p.110およびCruschina, 2015, p.9 参照）。

2.3. ところで、今まで見てきた証拠性の標識dice cheは、その多くが文頭に現れている（例文（3)It., (4)～(6), (9)～(11)）。事実、Cruschinaは、この標識が「文頭の位置にのみ現れる（they can only appear in sentence-initial position）」（Cruschina, 2015, p.14）ものであるとしている。

(16) *Era un bell'uomo, **dice che** (Cruschina, 2015, p.14)

この非文(16)を、dice cheが文頭に現れる(11)と比較されたい。さらに、Cruschinaは、dice cheに導かれた文が他の文に埋め込まれることはないとして、別の非文も例示している。

(17) *So che **dice che** non ha saputo rispondere a nessuna domanda (Cruschina, 2015, p.9)
「私は、彼がどの質問にも答えられなかったそうだ、ということを知っている」

この文の主節so「（私は）知っている」は、直接目的補語節を従える形式をとっているが、少なくとも(6)の和訳(i)に示したような証拠性の標識を伴う意味では、確かに従属節としては容認不可能性が高い。我々は、(17)が非文である理由を、文頭にあるべきdice cheが（so cheの補文標識たる）従位接続詞のcheに先行されているという点に求めたくなるかもしれない。しかし、(8)の接続詞perché「なぜならば…だから」に導かれた例を見ればわかるとおり、問題のdice cheは、従属節のなかに出現し得ないわけではない。以下に(8)を再掲するとともに、さらに同類の例をもう1つあげておこう。ここでは、従位接続詞を下線で示す。

(8) M'avete cercato <u>perché</u> **dice che** volevate un grigliato, dovevate fare un'offerta. Me l'ha detto Gianni stamattina
「聞くところでは、君らは升目用紙が欲しくて、申し入れの必要があったので、僕を探してたんだね。今朝ジャンニが僕にそう言ったよ」

(18) Sei rimasta con me <u>anche se</u> **dice che** dovevi andare all'ospedale
「君は、病院に行く必要があったんだそうだけど、それでも僕と一緒にいてくれたんだね」

(18)の接続詞句のanche se「もし…であっても」は譲歩の条件節を導くから、(8)のperchéの原因節も考え合わせると、状況補語節のうちにはdice cheを証拠性の標識として容認し、これを接続詞（句）に続かせ得るものがあると言えるだろう。

(8)だけでなく、(7)も一見文頭とは言い難い位置にdice cheが出てくる。

(7) Ha detto che grosso modo va abbastanza bene, solo l'aorta **dice che** è un po' dilatata
「彼は、大体のところまあ大丈夫だと言った。ただ、大動脈は少し膨らんでいるとのことだ」

転写に話し言葉の韻律 (prosody) が欠如しているため (注5に引用した転写の原文を見よ)、この文は曖昧である。上の和訳はsoloを逆接の接続詞「ただ、しかし」の意味で取ったものであるが、この取り方だと、è dilatata「膨らんでいる」の主語l'aorta「大動脈」がdice cheの前に出てテーマづけされていることになる。(7) の例と同様に、テーマ要素を下線で示しながら、これがdice cheに先行する例をもう1つあげておこう。

(19) A. I tuoi cugini come stanno?
B. Gianni sta bene, ma Carlo, **dice che** è malato
「A. 君の従兄弟の調子はどうだい?
B. ジャンニは元気だけど、カルロは病気だそうだ」

話者BはGianniとCarloを対比させながら両者をテーマにしている。後半の文は、(7) のsoloと同じ逆接の接続詞ma「しかし」でつながれ、è malato「病気だ」の主語Carloがdice cheを飛び越えて、やはり文の前方に飛び出している (Cruschina, 2015, p.14, n.16も参照のこと)。さて、(7) のもう1つの解釈に話を進めると、それは「…だけ」を意味する副詞としてのsoloの捉え方である。この場合、soloは、フォーカスの標識となり、(7) ではl'aorta「大動脈」をその作用域(scope)にもつ。つまり、l'aortaが文の前に出ることによりフォーカス化しているので、solo l'aortaを和訳すると、「大動脈だけが」のようになろう。(7) にこの解釈も可能なのは、次の類似の例を見てもわかる。

(20) A. Ho sentito che Gianni e Carlo sono malati.
B. No, solo Carlo, **dice che** è malato
「A. ジャンニとカルロが病気だと聞いたよ。
B. いや、カルロだけが病気だそうだ」

(7) の主語l'aorta「大動脈」の第2の解釈の場合と同様に、(20) の話者Bのセリフ中でも、下線で示した主語Carloはsolo「…だけ」に強調され、dice cheを飛び越えてフォーカス化している。[7]

我々は、(7) が2つの解釈をもち得るという曖昧さを巡って、(19)Bと (20)Bを対照させながら、文頭にあるはずのdice cheに先行できるものとして、テーマづけされた要素とフォーカス化された要素の両方があることを確かめた。加えて、(8) と (18) では、ある種の状況補語節を導く接

7 (7) に2通りの解釈があることについては、Edoardo Lombardi Vallauri教授に貴重なご教示を賜った。この場を借りて感謝の意を表しておきたい。

続詞（句）がdice cheを従えることがあるのも確認した。ただ、(7), (19)B, (20)Bなどはあくまで少数の、しかも文法的に何らかの手の加わった有標の例である。必然的に節の前に置かれるこれらテーマ、フォーカス要素や従位接続詞を取り除けば、やはり先頭に残るのは dice cheであり、これが理論的な無標の語順であることに間違いはない。

3. 証拠性の標識とその文法化

我々は、人づてによるまた聞き、水入らずのじか聞き（さらに、場合によっては民間伝承）を表すdice cheが証拠性の標識として固まった形式であり、そこでのdiceは、3人称単数の非人称的表現であるばかりか、法や時制の変更も許さず、否定や修飾も受け付けない、ということを検証してきた。これらを踏まえながら文法範疇という観点から見ると、diceは本来の動詞から逸脱し、cheを伴って副次的な文法範疇を形成する脱範疇化（decategorialization）の過程にまで足を踏み入れている、と言うことができる（Brinton & Traugott, 2005, pp.25–26を参照）。一方、意味論的な観点からすると、dice cheは「言う」という行為の語彙的な意味を弱めて意味の漂白化（semantic bleaching）も起こしている（*ibid.*, p.29を参照）。要するに、イタリア語の問題の表現は、ほんの部分的にではあれ、文法化の過程にあると言えるのである（Pietrandrea, 2005, pp.67–68も参照のこと）。

上に文法化の要因としてあげた脱範疇化と意味の漂白化は、文法化が一方向に進むことを裏付けるものとして Brinton & Traugott (2005)が列挙した一連の要因のうちの2つに過ぎない。付け加えておくと、これらの要因のうちには、類型論的一般性（typological generality）もあげられている（*ibid.*, p.28）。類型論的一般性とは、ある文法化の現象は、必ずしも特定の地域に限定されるものではなく、言語の違いを越えて存在する傾向を示す、というものである。実際、ロマンス諸語のなかには、問題のdice cheに相当する表現の文法化をさらに進めた言語が横並びでかなり存在する。以下にCruschina & Remberger（2008, pp.95–96）の引くこうした例 ―ラテンアメリカ・スペイン語（Sp.）、シチリア方言（Sic.）、サルデーニャ語（Srd.）、ルーマニア語（Ro.）、ガリシア語（Gal.）からの例― を（特に原文と英語グロスについてはそのまま）借用する。いずれの言語においても、太字で示したのがイタリア語のdice cheに対応する形式で、そのどれもが音韻縮約[8] を受けた結果、単一の語として書かれていることにも気を付けられたい（グロス中のSAYCは ‘say’+complementizerを示す）。

(21) Sp. Esto **dizque** va a ser pantano
this SAYC go.PRES.3S to be.INF swamp
（原典：C. E. Kany, *Impersonal* dizque *and its variants in American Spanish,* in “Hispanic

8 Brinton & Traugott（2005, p.27, n.27）は、音韻的・形態的境界の融合（fusion）と音韻的線分の消失（coalescence）を区別しているが、ここでは、両者を合わせて「音韻縮約」と呼ぶことにする。

review" 12 (1944), p.172)

「これは沼になるだろうと言われている」

(22) Sic. **Dicica** ci avivanu finutu i grana

SAYC to-him.CL have.IMPF.3P finish.PP the money

「彼らはお金がなくなってしまっていたそうだ」

(23) Srd. Custas columbas **nachi** s'abbaidana e an cominzadu a faeddare

these pigeons SAYC REFL[-]look.PRES.3P and have.PRES.3P start.PP to talk.INF

(原典：*Contami unu contu: racconti popolari della Sardegna,* vol.1: Logudoro. Alghero, Archivi del Sud, 1996)

「これらの鳩は互いに見つめ合い、語り始めたということだ」

(24) Ro. **Cică** banul n-aduce fericirea (原典：L. Ardelean)

SAYC the money not[-]bring.PRES.3S the happiness

「お金が幸福をもたらすわけではないと、そう言われるものだ」

(25) Gal. **Disque** a filla da Antonia marchou á Coruña vivir co mozo

SAYC the daughter of-the A. go.PAST.3S to C. live.INF with-the boyfriend

「アントニアの娘はボーイフレンドと暮らしにア・コルーニャに行ったそうだ」

イタリア語のdice cheの形式に比べると、(21)～(25)の太字部分が音韻縮約を受けている分だけ、全般的に文法化の度合いが進んでいることは一見してすぐにわかる(Brinton & Traugott, 2005, pp.27–28, (c) "Fusion and coalescence" の項を参照)。以下、イタリア語の場合と比較しながら、伝聞の証拠性を示す標識の文法化の進み具合について検討するに当たり、とりわけ(24)のようなルーマニア語cicăのふるまいを中心に見ていくことにする。なお、cicăの言語使用域も、通常は形式ばらない話し言葉に限られる。

4. ルーマニア語のCICĂ

4.1. 音韻・形態的側面：イタリア語のdice cheを逐語訳すれば、ルーマニア語ではzice căとなろう。しかし、中・南部イタリア語におけるような証拠性の標識としての働きを、現代ルーマニア語のzice căに求めることは難しい。ここで問題にするcicăの由来であるが、DEXONLINEでcicăを検索して出てくるデフォルトの(„sinteză"の)ページには、語源(etimologie)として[se zi]ce căがあがっている。このseは非人称・受身を表す再帰代名詞だから、se zice căはイタリアのsi dice che「…と言われている」にほぼ匹敵する。一方、Tiktinの辞典における見出し語cică(Tiktin, 1903–1925, vol.1)のなかでは、cicăは zice căの短縮形とされている(Cruschina & Remberger, 2008, p.101参照)。Ciorănescu(2002, p.854)の解釈も同じである。さらに、彼らの見解と合致して、Pană Dindelegan(2016, p.93)やZafiu(2020, „Notă istorică"の項)も、非

人称的なzice căが音韻縮約を受けたものだとしている。

我々は、イタリア語の例 (12)a, bで、dice cheを３人称単数のまま過去時制に置き換えた太字部分 (diceva che「…と言っていた」、disse che「…と言った」) が証拠性の標識としては解釈され得ないことを裏付けとしながら、dice cheがすでに固まった形式であって、標識中のdiceが活用により形態上の特徴を変えるのは不可能であることを確かめた。ルーマニア語のcicăも同様で、たとえば (３人称単数に絞って) 直説法半過去のziceaや接続法現在の(să) zicăと補文標識のcăを融合させて、それぞれ*ziceacăや*zicăcă などとすることはできない。それどころか、直説法現在zieceとの融合*zicecăさえ許されない (Remberger, 2015, p.34 参照)。ルーマニア語のcicăという形式は、zice căが形態的・音韻的に融合するにとどまらず、その音節数を減らして音韻縮約を起こすまでに至っているのである。

ここで、問題にしている証拠性の標識について、その歴史を少しさかのぼっておこう。我々は、イタリア語の例 (9), (10) で、dice cheが13世紀古イタリア語の時代から音韻縮約を被ることなく同じ形式のまま使われてきたのを見た。一方、ルーマニア語で非人称的に用いられていたzice căがcicăへと音韻縮約している証左が見つかるのは、Zafiu (2020, „Notă istorică”の項) によれば、19世紀後半のことだという (Pană Dindelegan, 2016, p.93も参照のこと)。だとすれば、のちに見る例文 (27), (33) に現れるcicăは、19世紀のテクストから引いたものだから、この形式が使われ始めて間もない頃の例だということになる。こうして、現代ルーマニア語では、本来の伝達動詞としてのzice「言う」は存続しているものの、(この節の冒頭で述べたとおり) 固まった形式としてのzice căが証拠性を示すことはもはやない。音韻縮約の過程を経て形式を固めたルーマニア語のcicăは、イタリア語の場合に比べ、縮約の過程を経た分だけ文法化を先に進めたものだと言えるだろう。

4.2. 統語的側面：cicăも伝聞による証拠性を示す標識であるから、イタリア語のdice cheと同様に、文頭に位置するのが無標の語順である (Cruschina & Remberger, 2008, pp.110–111 参照)。すでに (3)Ro.と (24) で無標の語順の例を見たが、さらに２つ、cicăで文が始まる例をあげておこう。(27) は、19世紀後半の創作民話作家Ion Creangă (1837–1889) の童話の冒頭の例である。

(26) **Cică** Ion e bolnav (Cruschina & Remberger, 2008, p.111)
「イオンは病気だそうだ」

(27) **Cică** era odată o babă și un moșneag (Creangă, p.44)
「昔々、お婆さんとお爺さんがおったそうな」

4.2.1. もちろん、イタリア語の (8) や (18) と同じように、状況補語節を導く従位接続詞 (下の (28) では原因節を導くpentru că「なぜならば…だから」) に続いて出てくることもある。

(28) Trebuie să fi fost beat pentru că **cică** ai băut prea mult. Mi-a zis Ștefan după nuntă
「君は酔っぱらっていたに違いない。だってたくさん飲み過ぎたんだそうだから。結婚式の後でシュテファンがそう言ったよ」

同様に、イタリア語の(7)や(19)B, (20)Bに並行して、ルーマニア語でもテーマ、フォーカス要素がcicăに先行することがある。

(29) A. Verii tăi ce mai fac?
B. Mihai e bine, dar Ion **cică** e bolnav
「A. 君の従兄弟の調子はどうだい?
B. ミハイは元気だけど、イオンは病気だそうだ」

(30) A. Am auzit că Mihai și Ion sunt bolnavi.
B. Nu, numai Ion **cică** e bolnav
「A. ミハイとイオンが病気だと聞いたよ。
B. いや、イオンだけが病気だそうだ」

(29)Bと(30)BのIonを見ると、それぞれがcicăを飛び越えて文の前方に置かれ、前者はテーマづけされ、後者はnumai「…だけ」の助けを借りてフォーカス化されている。

さらに、証拠性の標識 cică が打ち消しや修飾語と相容れないのも、イタリア語のdice cheと同様である((13)a, bのdice cheが証拠性の標識たり得ないのを再確認のこと)。つまり、否定のnu「…ない」や副詞のadesea「しばしば、よく」が次の例のように使われた場合は、cică自体を否定、修飾するものではない。

(31) a. **Cică** nu plouă la București
「ブカレストでは雨は降っていないそうだ」
b. **Cică** adesea rămânea încuiat în odaie zile de-a rândul (May, p.29)
「彼は、連日よく部屋に閉じこもったままだったということだ」

(31)aの否定のnuの作用域は、「ブカレストで雨が降っている」という命題内容にとどまり、この情報の出どころが伝聞によるものだということを否定するものではない(*nu cică)。(31)bの副詞adeseaも同様で、情報の内容を修飾はできても、情報源にかかわる標識cicăを修飾することは(語順が*adesea cică, *cică adeseaのいずれであれ)不可能である(Cruschina & Remberger, 2008, p.103参照)。

文の文法からテクスト文法に枠を広げると、イタリア語の(7)や(8)と同様に、(28)のcicăに関しても、その情報源たる発話行為者の具体的な指示対象(Ștefan)を想定することができる。

それは、過去時制の3人称単数に置かれた伝達動詞 a zis「言った」が、別途に表現されているからである。(28) を再掲するが、今度はこの伝達動詞を下線で示す。

(28) Trebuie să fi fost beat pentru că **cică** ai băut prea mult. Mi-a zis Ștefan după nuntă
「君は酔っぱらっていたに違いない。だってたくさん飲み過ぎたんだそうだから。結婚式の後でシュテファンがそう言ったよ」

(28) の例を見てもわかるとおり、ルーマニア語の cică も、文脈によっては、直接聞いた内容をじか聞きで伝え得ることができ、この場合は、証拠性の標識たる cică にも具体的な発話の行為者の想定が可能になる。この点では、次の2つの例 (32), (33) についても同様である。両者は、順に現代作家 Mircea Cărtărescu (1956–) の小説と19世紀の民俗学者 Petre Ispirescu (1830–1887) の童話から引いたものであるが、そのいずれにおいても、cică の情報源たる発話行為者は、それぞれ「神 (Dumnezeu)」と擬人化された「腹 (burta)」だと特定できる。

(32) Și Dumnezeu **cică** « Bine, adu-l aici să stau de vorbă cu el»
and God SayC well bring.imp.2s-him.cl here that talk.subj.1s with him
(Zafiu, 2020, ex. (5b) より引用。原典：M. Cărtărescu の小説 *Orbitor*)
「そこで神は言われたそうだ、『よし、彼と話すから、ここに連れて来るがよい』と」

(33) […] să căutăm ceva de lucru, că burta, auzi, **cică** n-am
that look for.subj.1p something of work because the belly hear.imp.2s SayC not-have.1s
mâncat de ieri și cere, sărmana
eat.pp since yesterday and beg.pres.3s poor thing
(Ispirescu, p.26/51; Remberger, 2015, p.35, ex.(26) も参照のこと)
「何か仕事を探そうぜ、だって、聞いてみろよ、腹が『俺、昨日から何も食ってないんだよ』ってせがんでるぜ、かわいそうに」

我々は、直接の情報源からのじか聞きの場合、ルーマニア語と同様に、イタリア語の dice che も具体的な発話行為者の想定を許すことを見た (例文 (7), (8) 参照)。しかし、イタリア語との類似点はここまでである。2.1節の冒頭で述べたように、イタリア語の dice che はもっぱら間接話法を導いてくる。それは、(32), (33) よりも前に示したルーマニア語の cică の例についても同じである。ところが、(32) と (33) では、cică とともに直接話法の手法が用いられている。(32) が直接話法であることは、原文における引用符 «　» の使用からも明らかである。(33) については、Remberger (2015, p.36) は直接話法と間接話法との間で疑問を呈しているが、ここでは、

拙訳の『　』で示したように、直接話法として解釈した。[9]

ルーマニア語のcicăが直接話法と共存できるのは、この融合した形式の後半部分-căが、元来の補文標識としての機能を失ってしまったからだと考えられる。間接話法には直接目的補語節を導く補文標識（ルーマニア語ではcă、イタリア語ではche）が必要である。それに対し、直接話法にはそれが必要ない。したがって、cicăが直接話法に用いられるということは、とりもなおさず、もはや-căが補文標識として意識されていないことを意味する。補文標識としての-căの価値が忘れ去られた結果、cicăに畳みかけるように、もう1度補文標識のcăが現れたとしても何ら不思議ではない(Cruschina & Remberger, 2008, p.104および Remberger, 2015, p.34参照)。(34)では、下線で示したcăの繰り返しが間接話法としての文の解釈を補強していると考えてもいいだろう。

(34) **Cică** <u>că</u> aș fi cerut.... ieșirea României din UE（Zafiu, 2020, ex. (2)）
「私がEUからのルーマニアの脱退を求めたなどと囁かれているそうだが…」

4.2.2. 補文標識としての-căの性質が忘れ去られた結果、cicăの文法化にはさらなる進展が見られる。まずあげられるのは、（下の例(35)が示すように）cicăの後には必ずしも文が続くとは限らないということである。

(35) E adevărat că Ion pleacă la New York? – **Cică** da/**Cică** nu(Cruschina & Remberger, 2008, p.103)
「イオンがニューヨークに出発するというのは本当かい？ ―そのようだ／違うようだ」

太字のcicăに続くのは文ではなく、ここではda「そうだ、はい」またはnu「違う、いいえ」のような肯定や否定を表す副詞のみである。さらに、cicăは、絶対文頭ばかりでなく、文中の様々な位置に出現することができる。すでに見たとおり、イタリア語のdice cheも、ルーマニア語の cică も、状況補語節を導く従位接続詞の後（(8), (18)および(28)）やテーマ、フォーカス要素の後（(7), (19)B, (20)Bおよび(29)B, (30)B）に出てくることはある。しかし、いずれの場合も、その配置は従位接続詞やテーマ、フォーカス要素の方に原因があって、これらがdice che, cicăで始まる文の前方に出るのである。それに対し、Remberger (2015, p.36)から引いた

9 Remberger(2015, p.36)は、(33)の文全体の発話者が自分を主語としてn-am mâncat「俺、食ってないんだよ」と言っている、とする間接話法の解釈も可能だとしている。ただ、証拠性の標識としてのcicăは、発話という行為自体よりも、むしろ情報の出どころの方に重点を転じてしまうので、să căutăm ceva de lucru「仕事を探そうぜ」という提案の理由を、わざわざburta「腹」、auzi「聞いてみろよ」と言いながら、鳴っている腹のせいにしたい(33)の文脈の流れのなかでは、情報源が話者自身であることをことさら示そうとする間接話法の解釈は不自然であるように見える。ましてや、引用文中最後の3人称単数の動詞cere「せがんでるぜ」の主語はburta「腹」でしかあり得ないから、擬人法という修辞的観点からしても、間接話法の手法では、一貫した擬人法を断ち切ってしまうというぎごちなさが生じる。以上の理由から、我々は直接話法の解釈しか残されていないと判断した。なお、(33)を直接話法として解釈するに当たっては、Anton Mihai Popa氏からの個人的なコメントがたいへん役に立った。ここに、感謝の意を表したい。ただし、最終的な判断の責任を負うのは筆者ただ1人である。

次の4つの例のなかには、事情が全く逆のものがある。それは、cică自体が位置を変えることによって、文中の様々な要素の間に出現するという場合があるからである。

(36) a. **Cică** individul a fost prins
b. Individul **cică** a fost prins
c. Individul a fost **cică** prins
d. Individul a fost prins **cică**
「奴は捕まったそうだ」

最後に示した和訳は、4つの文いずれにも当てはまる（いわば最大公約数的な）意味に過ぎない。また、(36)bの主語individul「奴」は、ここではテーマやフォーカスになって文の前に出たのではなく、cicăの方が、主語と述語a fost prins「捕まった」の間に挿入されたものとして考えられたい。すると、(36)b–dの文内部のcicăの位置というのは、副詞（句）や挿入句の現れる位置に相当することになる。文中の要素どうしの隙間を狙ったこのようなcicăの配置の可能性というのは、イタリア語のdice cheにはあり得ない（上の例(36)dと非文の(16)とを比較のこと）。イタリア語のdice cheは、せいぜいテーマづけやフォーカス化のために他の要素が文の前に出るのを許しはしても、基本的にはいつも文頭を定位置としている。一方、ルーマニア語では、文頭を無標としつつ、他要素が文の前に出るのを許すという点までは同じでも、逆に、cicăの方が動いて、文中で副詞（句）や挿入句のように配置される場合もあるという点で、イタリア語の場合とは全く異なっている。今やcicăは、元来の形式「動詞（zice）＋補文標識（că）」が現れ得ないはずの文中の位置（言うなれば副詞の位置）にも出現可能になっているのがよくわかる。つまり、元来の形式が再分析されて単一の形式となった結果、脱範疇化がさらに進んで副詞にまで変容してしまっているのである（E.-M. Remberger, 2015, p.36参照）。

4.3. 意味的側面：我々は、第3節の最初の段落で、イタリア語のdice cheが「言う」という行為の語彙的な意味を弱めて、すでに意味の漂白化の過程に差し掛かりつつあるのを指摘した。ルーマニア語の場合、cicăは今や副詞である。このような脱範疇化を促すほどcicăが不可分な要素となっているとすれば、発話行為を表す動詞としてのzice「言う」の記憶も薄れてしまっているという予測さえ立てられそうである。事実、次の例文では、cicăが活用した動詞zice「言う」と一緒に使われているが、その意味に重複はない。

(37) Ziua se cunoaște de dimineață, **cică** așa <u>se zice</u> (E.-M. Remberger, 2015, p. 35)
「その日［がどんな日か］は朝からわかると、そう言われるものだ」

下線で示した非人称的再帰動詞se zice「言われる」は、直説法現在に置かれて十全の語彙単

位を成している。そして、cicăの後で、これがașa「そう、そのように」を伴ってașa se zice「そう言われる」と、元来のcicăと似た内容の言い回しになっている。畳みかけるようにして cică と așa se zice が続くにもかかわらず、意味の重複が生じないのは、cicăがもともと備えていた動詞的な語彙としての意味をすり減らし、もっぱら伝聞標識としての機能のみを残そうとしているからのように見える。少なくとも、逆の方向性は考えられない。これは、意味の漂白化がいっそう進んだ結果である。意味的側面においても、イタリア語のdice cheに比べて、文法化の度合いがずっと大きいのは明白である。

5. むすび

ロマンス諸語のなかには、もともと「発話行為『言う』を表す動詞＋補文標識」という2つの要素の連なりだったものが固定化し、伝聞による証拠性の標識と化した形式をもつ言語がかなり存在する。本稿では、それらのうち、イタリア語のdice cheとルーマニア語のcicăに絞って、それぞれの文法化の度合いを考察した。その結果、イタリア語のdice cheは、文法化に足を踏み入れているとしても、まだそのほんの初期の段階にとどまっているに過ぎず、それに比べると、ルーマニア語のcicăの方は、文法化がはるかに進んでいる、という事実が浮かび上がってきた。以下に、両言語の証拠性の標識の特徴を、それぞれが互いにもつ類似点と相違点とに分けて具体的にまとめてみる。ここに分類した諸項目が、それぞれの文法化の度合いについての我々の結論である。

I. イタリア語 dice che とルーマニア語 cică の類似点

I.1. 音韻・形態的側面：音韻縮約の有無を巡ってむしろ音韻的な違いの方が目につきやすいdice cheとcicăであるが、形態上は両者とも固まった形式になっているという点で共通している。もともと発話行為を表す動詞部分のdiceも、cicăのci- (<zice) も、直説法現在3人称単数の形式から発しているが、今では法や時制、人称や数による活用が不可能な要素となっている。

I.2. 統語的側面：いずれも、文頭を無標の位置とする。ただし、状況補語節内に現れると従位接続詞に先行されることもあるし、また、dice cheやcicăの前にテーマ、フォーカス要素が飛び出すのを許すこともある。さらに、否定辞や副詞の作用域に入ることがないのも (13)/(31)、両言語での類似点である。他方、伝聞の情報源に目を転じ、検討の幅を文の文法からテクスト文法に広げると、文脈の助けによっては、発話行為者の具体的な指示対象が特定されることもある (7), (8)/(28)。

I.3. 意味的側面：もともとはdice cheもcicăも「言う」という行為を表す動詞的な意味を包含しているはずであるが、両者とも共通して、こうした語彙的な意味を弱めつつ、その伝える命題内容が他に情報源をもつ伝聞であることに重きを置く傾向を強めている。

II. イタリア語 dice che とルーマニア語 cică の相違点

II.1. 音韻・形態的側面：イタリア語が13世紀から証拠性の標識としてのdice cheの形式を保持しているのに対し、ルーマニア語は19世紀にzice căをcicăに音韻縮約させている。

II.2. 統語的側面：イタリア語では、dice cheのcheが今日でも補文標識としての性格を温存しているのに対し、ルーマニア語のcicăの-căは補文標識の記憶を失う途上にある（直接話法への適応（32），（33）、補文標識のcăとの共存（34））。そのため、cicăは、後に文を従える必然性をなくし、副詞として文中の様々な要素間に現れることができる。もとの形式「動詞（zice）＋補文標識（că）」が再分析を重ねた結果、ルーマニア語のcicăは脱範疇化を進め、今や副詞になり切っている。

II.3. 意味的側面：このように度重なる再分析は、もともとの動詞部分ci-（<zice「言う」）の方にも及び、cicăのもつ発話行為の意味の希薄化をかなり進めているので、同文にcicăが表現されているにもかかわらず、すぐ相前後して、「言う」を表す十全な動詞が重複することさえある（37）。イタリア語では、dice cheに意味の漂白化の兆しがあるとはいえ、このような重複が無意味なトートロジーを引き起こすことは言うまでもない。

（本学客員教授＝外国語（イタリア語）担当）

文献一覧

●テクスト

Creangă: Ion Creangă, *Povestea porcului,* in Id., *Povești, amintiri, povestiri.* București, Editura Eminescu, 1980, pp. 44–58.

Cristie Eng.: Agatha Christie, *The thirteen problems.* London, Harper, 2002.

Cristie It.: Agatha Christie, *Miss Marple e i tredici problemi,* trad.: Lydia Lax. Milano, Mondadori, 1989.

Cristie Jp.: アガサ・クリスティー『火曜クラブ』中村妙子訳　東京 早川書房 2003.

Cristie Ro.: Agatha Christie, *13 [treisprezece] probleme,* trad.: Cristina Mihaela Tripon. București, RAO, 2014.

Ispirescu: Petre Ispirescu, *Cei trei frați împărați.* https://ro.m.wikisource.org/wiki/Cei_trei_frați_împărați（アクセス日：2022年8月28日）

May: Karl May, *Căpitanul gărzii,* in Id., *Dragostea ulanului,* vol. 3. București, Dexon, 2019.

Moravia Jp.: アルベルト・モラヴィア『ローマの女』清水三郎治訳　東京 弘文堂 1966.

Novellino: *Il Novellino.* A cura di G. Favati. Genova, Bozzi, 1970.

●参照文献

Brinton, L. J. & E. C. Traugott (2005), *Lexicalization and language change.* Cambridge, Cambridge University Press.

Ciorănescu, A. (2002): *Dicționarul etimologic al limbii române.* București, Saeculum I. O.

Cruschina, S. (2011): *Tra* dire *e* pensare: *casi di grammaticalizzazione in italiano e in siciliano,* in “La lingua italiana: storia, strutture, testi” 7, pp. 105–125.

Cruschina, S. (2015): *The expression of evidentiality and epistemicity: Cases of grammaticalization in Italian and*

Sicilian, in “Probus” 27(1), pp. 1–31.

Cruschina, S. & E.-M. Remberger (2008): *Hearsay and reported speech: Evidentiality in Romance,* in “Rivista di grammatica generativa” 33, pp. 95–116.

Cruschina, S. & E.-M. Remberger (2017): *Before the complementizer: Adverb types and root clause modification,* in M. Hummel & S. Valera (eds.), *Adjective adverb interfaces in Romance.* Amsterdam, Benjamins, pp. 81–109.

Dexonline: *Dexonline, dicționare ale limbii române.* https://dexonline.ro（アクセス日：2022年8月16日）

Lorenzetti, L. (2002): *Sulla grammaticalizzazione di “dice” nell'italiano parlato,* in S. Heinemann *et al.* (Hrsg.), *Roma et Romania: Festschrift für Gerhard Ernst zum 65. Geburtstag.* Tübingen, Niemeyer, pp. 211–221.

Pană Dindelegan, G. (2016): *The subject* (in §2.4: *Argument structure*), in Ead. (ed.), *The syntax of old Romanian.* Oxford, Oxford University Press, pp. 89–123.

Pietrandrea, P. (2005): *Epistemic modality: Functional properties and the Italian system.* Amsterdam, Benjamins.

Pietrandrea, P. (2007): *The grammatical nature of some epistemic-evidential adverbs in spoken Italian,* in “Rivista di linguistica”, 19 (1), pp. 39–63.

Remberger, E.-M. (2015): *“I didn't say it. Somebody else did.”: The Romanian hearsay marker* cică, in *Redefining community in Intercultural context. 4th RCIC Conference, Brașov, 21 May 2015,* pp. 31–41.

Rohlfs, G. (1966–1969): *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti,* 3 voll. Torino, Einaudi.

Serianni, L. (1991): (con la collaborazione di A. Castelvecchi), *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria.* 2ª ed. Torino, UTET [orig. 1988].

Tiktin, H. H. (1903–1925): *Rumänisch-deutsches Wörterbuch.* 3 Bänden. Bukarest, Staatsdruckerei.

Willett, T. L. (1988): *A cross-linguistic survey of the grammaticization of evidentiality,* in “Studies in language” 12, pp. 51–97.

Zafiu, R. (2020): *Biografia gramaticală a unui cuvânt: „cică”.* https://www.facebook.com/iordan.rosetti/posts/532635244064118/（アクセス日：2022年8月26日）